

イガイガの恋

あけのまだし

実りの秋になりました。山の中の木々も、たくさんの実をならしています。

一匹の熊が栗の実に声をかけました。冬に向けてたくさん食べなければならない熊は栗の実の様子が気になって仕方ないようです。

「やあ、栗君。大きくなったね」

「やあ、熊君」

「早く落ちてきなよ。僕が食べてあげるからさ」

「君は食いしん坊だねえ。でも、そう簡単には食べられないよ」

「ところでさ、栗君。海という所を知っているかい？」

「ああ、聞いた事はあるよ。川のずっと先にあるんだろ」

「前に渡り鳥君に聞いたんだけど、海の中に君に良く似た生き物がいるらしいよ」

「似てるって、どんな風に」

「そのイガイガだよ。そういうのを持っているらしいんだ」

「へえ・・・」

三日後、その栗はイガイガごと地面に落下しました。

「やあ、やっと落ちてきたね。約束だから食べてあげよう」

「約束した覚えはないけどね。でも、ちょっと僕の頼みを聞いてくれないか」

「何だい？」

「この前、海に僕に似たのがいるって言ったろ」

「うん」

「ぜひ、その生き物に会ってみたいんだよ。僕を川に流してくれないかな」

「でも、それだと僕が君を食べれなくなってしまうよ」

「頼むよ、今回だけでいいんだ」

熊は悩んだ末、栗の頼みを聞いてあげる事にしました。

「残念だなあ、美味しそうなのに・・・」

「すまないね、この恩は忘れないよ」

栗は名残惜しそうな熊に見送られて川を下っていきました。

「うーん、海は遠いなあ・・・」

流れに身を任せて一週間、栗はようやく海にたどりつきました。

「いやあ、広いなあ。山の中とは大違いだ」

あまりに広すぎてどうしたらいいのか分かりません。栗は砂浜にいる生き物に尋ねてみました。

「ねえねえ、君」

「おや、珍しい。誰だい、君は？」

「僕は山から来た栗だよ」

「そうかい、僕はカニだ。よろしく」

「実はこの海のどこかに僕に似た生き物がいるって聞いたんだ。知らないかな？」

「ああ、多分それはウニの事だね」

「ウニ？」

「そう、君みたいなイガイガを持っているらしいよ」

「それで、どうすれば会えるんだろ」

「ウニは海の底に張り付いたりしているからね。君、潜れるかい？」

「うーん、泳ぎは得意じゃないんだ」

「そうだろうね。じゃあ、誰かに頼んでみるか」

カニはたまたま通りかかったウミガメに声をかけました。

「という訳なんだ。ウニを連れて来てもらえないかな」

「わかった、やってみよう」

ウミガメは潜って行きました。暫くして、口に黒いイガイガを咥えて戻ってきました。

「ほら、連れて来たぞ」

「どこなの、私に似てるってひとは」

こうして、山と海のイガイガ同士が初めて対面しました。

「ああ、本当に私に似てるわ」

「いやあ、びっくりしたよ・・・」

ふたりは興味津々でお互いを観察しました。

「ウニさん、君はイガの中に実はないんだね」

「そうよ。栗さんは大きな実が3個並んでるわね」

「僕たちは木になるんだけど、君は？」

「違うわよ、海にはそんな木はないもの」

「そうかあ・・・」

ふたりは楽しく故郷の事を語り合いました。

「それでね、その熊君が僕を川に流してくれたんだ」

「きっと優しいひとなのね」

「いや、そうでもないよ。凄い食いしん坊でね、僕を食べ物としか見てないんだ」

「あら、海にもそういうひといるわよ。ラッコっていうんだけど、これが食いしん坊でね・・・」

海の中の話は栗にとって珍しい事ばかりでした。

「楽しそうだなあ、僕も君と一緒に海で暮らしたいなあ」

「私もよ。ぜひいらっしゃい」

そういう訳で、ふたりはウミガメに運んでもらって海底に行ったのですが・・・

「だめだよ、こんな奴」

ウニの仲間たちは、いい顔をしませんでした。

「どうしてだめなの？」

「だって、ウニじゃないもん」

「そーだ、そーだ」

「似てるからいいじゃないの」

「似てるだけだろ。岩にも貼り付けないし、全然違うよ」

「違うからだめなの？」

「そうだよ」

「誰がそんなの決めたのよ」

「知らないよ、昔からそうなのさ」

結局、栗はウニの仲間に認めてもらえませんでした。

「ひどいわ、みんな」

「ごめんよ、僕のせいで・・・」

「いいの、栗さんは悪くないもの」

「でもさ、やっぱり僕と君と一緒に暮らすのは無理なんじゃないかなあ」

「どうして？」

「うーん、やっぱり外見が似てるだけだし」

「じゃあ、あなたは私が嫌いなの？」

「いや、そんな事はない。実はね、最初に君を見たときから・・・」

栗はウニへの好意を告白しました。

「だから私と海に来たいって言ったのね」

「そうなんだ」

「嬉しいわ・・・」

ふたりはお互いの気持ちを確認する事が出来ました。しかし、それだけでは問題は解決しないのです。

「どうすればいいんだろうね」

「とりあえず、頭のいいひとに聞いてみましようか」

「うん、そうだね」

そこで、ふたりは海の中で一番頭がいいというクジラの所へやってきました。

「こんにちは、クジラさん」

「おや、珍しい。君は山の栗だね」

「え、僕の事を知っているんですか？」

「我々の祖先は昔、陸に住んでいたからね。たいがいの事は知っているよ」

「さすがクジラさん、頼りになるわ」

ふたりは自分たちの問題をクジラに相談しました。

「うーん、それは中々難しい問題だねえ・・・」

「やっぱりだめなんですか」

「でも、私たちこんなに似ているじゃない」

「確かに似てはいるが、君たちは根本的に違う種族だからねえ」

「どうにかならないのかしら」

クジラは暫く考えてから言いました。

「もしかすると、遺伝子とかいうものをいじれば、何とかなるかもしれない」

「遺伝子ですか」

「何なの、それは」

「いや、私も詳しくは知らない。だが、おそらく人間なら知っているだろう」

「人間ですか」

「ああ、あの変な生き物ね」

クジラはウミガメと協力して情報を集めてくれました。

「どうやら、この近くに遺伝子を知ってそうな頭のいい人間がいるらしい」

「その人に聞けば、僕らの仲は何とかなるのでしょうか？」

「それはわからない」

「どうする？」

「行ってみましょうよ。ここまで来たらだわ」

「そうだね」

こうして、ふたりはウミガメに連れられて人間の所へ向かいました。

「じゃ、私はこれで」

「ありがとう、ウミガメさん」

ふたりはコンクリートの上に残されました。

「変わった地面だね。岩かな？」

「わからないわ。あ、誰か来るわよ」

ふたりを見つけたのは大学の先生でした。

「おや、こんな所にウニが。しかも栗が一緒とは」

「あの、人間さんですか？」

「そうだよ」

「実は僕たち、遺伝子について知りたいんですけど」

「ほう、じゃあ私の部屋に行ってゆっくり聞こうか」

先生はふたりを自分の研究室に運びました。

「それで、どういう事なのかな？」

「いや、こういう訳でして・・・」

栗は自分たちの事情を先生に説明しました。

「なるほどね、そういう事か」

「それで、どうなんでしょうか」

「結論から言うとね、遺伝子をいじったとしても君たちを同じにする事は出来ないんだよ」

「そうですか・・・」

「しかし、一緒のものにする事は出来そうだよ」

先生はふたりをある場所へ連れて行きました。

「やあ、近藤君」

「あ、先生」

「あの、この人は？」

「うん、彼はね、ここの学食のチーフだよ」

「お、美味そうなウニと栗だね。どこで採ってきたんですか」

「ちょっとね。彼らを一緒に出来るかい？」

「お安い御用ですよ」

こうして、ふたりは一緒に調理されて、お皿に仲良く盛り付けられたのでした。